慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トーマス・マンと其の時代（二）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.10 (1915. 10) ,p.1144(68)- 1166(90)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トーマス・マンと其の時代（二）

高橋誠一郎

三

此論爭の緒を引起したる前年、即ち一千六百年の末日を以て英國東印度會社は成立せり。從來 Merchant Adventurers 會社に向つて加へられたる攻擊の鋒鋩は轉じて東印度會社に集中せられたり。印度洋の如く遠隔にして且つ危險なる海洋の航行は國家の海上權に有害なる影響を及ぼすものなりとは非難の第一要點にして、會社は東洋に於て英國商品に對し大なる需要を望むこと能はず、從つて彼等は彼の地中海沿岸の民が古くよりして行ひ來りしが如く、貿易の必要上地金を印度に輸送するの已むなきに至り國內に於ける貴金屬の存在量を減少せしむるに至る可しとは非難の第二なり。而して初め regulated company として成立せる東印度會社が漸次其形態を改めて株式會社と爲るに及び遠洋貿易を行ふに當り、東印度會社の如き株式會社と Merchant Adventurers の如き regulated company との利害得失を比較考量するに由りて問題は一層の紛糾を極めたり。

東印度會社を以て英國の海上權を危ふからしむるものなりとの非難は會社の創立日尙ほ淺く、國內の船舶總數未だ大なるに至らず、長時の航海と其間に發生する損害とは是に由りて贏ち得可き利益に比して均衡を失するの觀ありし當時に在りて殊に大なりしなり。會社は海上勤務の爲めに斃れたる船員の寡婦孤兒を救濟するに努め、而して「一千の孀婦、數百の盲人跛者」は相結んで會社の制壓に反對して議會に請願する所ありき。然るに一千六百十三年、東印度會社に屬する Trades Increase なる商船が Bantam 附近に於て難破するや江湖の非難は殊に甚しく、一千六百十五年 J. R. と稱する匿名の一士 Trade's Increase なる一冊子を著し、Merchant Adventurers 會社の利益を擧げて（十頁）東印度會社を攻擊し、同會社を以て東印度產貨物の供給制限、其他の不都合なる所爲を行ふものとして之を非難し、且つ彼等の營める貿易は英國の海上權を滅殺せしむるに至るものなりとの說を主張せり。

東印度會社は此書を以て秩序を紊亂するものとして星衙門に告發せんとせり。

時に同會社の取締役たりし人に Sir Dudley Diggs（或は Digges 一千五百八十三年―一千六百三十九年）あり。同會社に對する嫌疑を分疏するが爲めに一書を刊行す可しとの意見なりしが、軈て同年 The Defence of Trade; in a letter to Sir Thomas Smith, Knight, Governor of the East India Company, From one of that Society. なる小冊子を公にせり。彼は此書に於て貿易の危險、船舶及び海員の傷害增加及び其結果たる海上權の減少等を論據とせる東印度會社の攻擊に答へ、併せて東印度貿易に因りて英國產織物類の輸出額增加及び同會社設立以後香料其他印度產貨物の價格下落せる等の事實より生ずる國家の利益を指摘せり。而して本稿の主題たる Thomas Mun の A Discoverse of Trade, From England vnto the East-Indies: Answering to diuerse objections which are usually made against the same. に至りては一層明確に東印度會社に對する非難を辯破したるものなり。

此著は初め T. M. の匿名を以て一千六百二十一年倫敦にて刊行せられたり。McCulloch は其著 Literature of Political Economy（一千八百四十五年）に於て此書の初めて刊行せられたるは一千六百〇九年なりと稱するも（同書九十八―九頁）、然も A Discoverse of Trade の四十七頁には一千六百〇八年及び一千六百十二年の事實を記し、更に其二十頁及び三十八頁には一千六百二十年の事實を載するに據りて察するに McCulloch は同じく一千六百二十一年に出版せられたる此書の再版を手にし、之に "The second impression, corrected and amended" の文字あるより推して唯だ漠然と此書の第一版を以て一千六百〇九年に出でたるものと誤り傳へたるなる可し。而して Dr. Edmund Frsiherr von Heyking 亦其著 Zur Geschichte der Handelsbilanztheorie（一千八百八十年）に於て同一の誤謬に陷れり（其七十二頁）。恐らくは McCulloch を唯一の權威として偏に之に據り、此書の第一版を參考することなくして終りたるものなる可きか。此書は一千六百二十五年 Purchas's Pilgrims 中に再刻せられ、後一千八百五十六年 McCulloch が Political Economy Club の爲めに編纂したる Early English Tracts on Commerce 中に加へられたり。今日より見る時は各版孰れも皆稀少なる珍本なり。

翌一千六百二十二年に至り Free Trade, or the Neans to make Trade flourish; wherein the causes of the decay of trade in this kingdom are discussed, and the remedies also to remove the same are represented.（一千六百五十一年再版）なる一書上梓せられたり。此書の著者たる Edward

Misseldenは其翌一千六百三十三年より約十ヶ年間Delftに於けるMerchant Adventurers會社のdeputy-governorたりし人にして、彼は一千六百二十二年、貿易調査常置委員會の設立に促されて筆を取れるもの、其期する所は當時に於けるregulated companyの殊にMerchant Adventurers會社に對する非難を論駁し、頑強に之を辯護せんとするにあること此書の五十頁若しくは七十四頁等によりて規知することを得るなり。著者は先づ國内に於ける貨幣缺乏の原因を以て英國貨幣の價値高く、和蘭に於て高率を以て流通するが故に著しく同地方に吸收せらるゝこと、外國商品の消費過多なること、並に英國に於て東印度貿易の資本を要求すること大なるの三點に歸せり、即ち其第三の原因に關して曰く "The special remote cause of our want of money is, the great want of an East India Stock here at home: for the stock of the East India Company, being of great value, and collected and contracted from all the other particular trades of the Commonwealth; and a great part thereof having been embargued and detained now for more than five years past;..... this loss I say..... is the more intolerale, in that the Commonwealth hath lost the use and employment of the stock itself, and all the increare of Trade which the same might have produced in the several trades of the subjects, whereby abundance of treasure might have been brought into this land in all this time." (十三頁)と。次に國外に於ける貨幣缺乏の原因を最近に於ける戰亂並に現金を以て行はるゝ異教徒との貿易に求めたり。彼は又貿易衰微の原因を貨幣の缺乏、東印度貿易資本の損傷、利子の高率なること並に訴訟の費用累むこと等に在りとなし、英國の漁業は其沿海に於ける外人の侵入によりて衰退せりと論じ、織物業の進歩を沮止するの障害として不正品の濫製、虚僞の封印並に不完全なる檢査(百二十七頁)を攻擊し、更に章を改めて獨占を論じ、次で(第四章)貿易上に於ける支配權の必要を說き、之に對する救濟策として外國貨幣をして内國貨幣と同一價値にて流通せしめ、以て貨幣を國内に保留すること、過度の外國品消費を防遏するが爲めに輸入品に制限を加ふることを主張し商船は相互の安全を保つが爲めに隊を組みて航海す可く、高利を防ぐが爲めには貨幣及び爲替手形の流通を增加せしむ可く、而して獨占は全然之を根絶せしめんことを主張せり。

Malynesは此Misseldenの著に對して同じく一千六百三十三年The Maintenance of Free

Trade according to the three essential parts of trafficque, namely, commodities, moneys, and exchange of moneys by bills of exchanges for other countries, or an answer to a Treatise of Free Trade, or the meanes to make trade flourish, lately published, を出版せり。彼の意見は已に其前著に於て明かなるが如く、啻に商業上の不景氣のみならず、社會上萬般の害惡は悉く皆外國爲替の理法中に其原因を發見するものなりとなし、之に對する唯一の救治策は彼の staple system を復活するを以て足れりと爲すにあるを以て、Misselden が商業衰微の原因として擧げたるものゝ誤謬を論證し、其得意なる外國爲替の學說を反覆し、商品は肉體なり、貨幣は精神なり、而して爲替は精神の能力なり、商業衰頽のあらゆる原因は殆ど皆之を貨幣の缺乏に歸することを得るなりと說けり。

Misselden は翌一千六百二十三年 The Circle of Commerce; Or the Balance of Trade, in defence of Free Trade; opposed to Malynes Little Fish and his Great Whale, and poized against them in the scale; wherein also exchanges in General are considered を著して Misselden と答へ、根本よりして其外國爲替に關する意見を排斥し、東印度會社を辯護し、地金輸出の損失は東洋產貨物を他の歐洲諸國に賣却して得る利益によりて優に償はるゝ所以を說けり（同書三十四頁）。凡そ當時に於ける論客の議論は其個人的地位によりて動かさるゝ所多し。今 Misselden が其曾て攻擊したる東印度會社を辯護するに至りしは彼と同會社との間に既に何等かの關係を生じつゝありしにはあらざるか。果然此翌年より一千六百二十八年まで彼は同會社の爲めに使雇せられ、其和蘭との契約締結に際して折衝の勞を執ることゝなれり。

是に於て乎 Malynes 亦同年 The Centre of the Circle of Commerce: Or a Refutation of a Theatise entitled the Circle of Commerce or the Balance of Trade を刊行して Misselden を攻擊し論者は爲替の秘密を解せざるものとなし、彼等をして眞に他の歐洲諸國に輸出したる香料に代へて地金を齎す可きことを强制する條例あるにあらざれば彼の所謂地金輸出の利益は幻想なり（同書百十四頁）と爲せり。彼は別に又 Lex Mercatoria, or the Ancient Law Merchant. Divided into three parts; according to the essentiall parts of Trafficke. (一千六百二十二年) 並に England's View in the Unmasking of two Paradoxes; with a replication unto the answer of Maister J. Bodine (一千六百〇三年) の著あり。彼は其幾多の著書內に自然法の觀念を發見することを得る最初の英國記者の一人なり。彼は疑もなく之

を羅馬法より承けたり。彼は又時間、距離、信用狀態と云ふが如き一定の要素を認めて爲替手形の價値決定を研究せり、而して當時に於ける貿易の狀況及び國際取引決濟の方法は一見「爲替は商品を支配す」と云へる彼の意見に保證を與ふるの概ありしなり。彼の意見に據れば king's exchanger（國王によりて任命せられたるものにして地金及び延金と交換して鑄貨を與ふるもの）及び兩替商、金匠の類は國庫の收入を詐取し國王の損害を以て自己の富を增大するものにして、其生涯を通じて「爲替の優越」を主張し「兩替人の詐術」を暴露し、而して爲替は「Par pro pari, 價値に對する價値」の原則に從つて行はれざる可らざるを論じたり。

Mun は、又 Petition and Remonstrance of the Governor and Company of Merchants of London trading to the East Indies. 起草の任に當り一千六百二十八年十月之を下院に提出し地金輸出の必要を論じたり。（此書は一千六百四十一年再び公にせらる）。次で Cromwell 時代に於ける通貨問題に關する最大の權威と看做されたる Sir Ralph Maddison は一千六百四十年 England's Looking in ond out.（翌年再版）の第二章に於て貿易平衡の說を述べ次で一千六百五十五年 Great Britain's Remembrancer, looking in ond out. の新題の下に之を改版增補せり。而して Henry Robinson 亦一千六百四十一年、其 England's Safety in Trades Encrease. の二十四頁に於て東印度會社の地金輸出を辯護せり。

斯くの如き時代の氣運は又 Mun の子 John Mun をして其父の遺著 England's Treasure by Forraign Trade. or, the Ballance of our Forraign Trade is The Rule of our Treasure. を上梓せしむるに至らしめぬ。父の逝けるは一千六百四十一年にして（享年七十歳）、同年七月二十一日、Bishopsgate なる St. Helen's 寺院の內陣に葬る）子の之を出版せるは一千六百六十四年なり。而して此書は一千六百六十九年第二版を、同九十八年第三版を一千七百年第四版を（Lewis Robert の Merchant's Mappe of Commerce と合卷）、同十三年、第五版を、同五十五年第六版を刊行し、越へて第十九世紀に至り一千八百五十六年には Mcculloch の Early Tracts on Commerce 中に挿入せられ更に一千八百九十五年 Ashley の Economic Classics 中の一篇として出版せられたり。

吾人は是より彼が前後の二著述を通じて彼の時代と其間に流るゝ經濟思潮の一班を窺はんとす。

四

希望峰の南端を廻りて東印度に到るの航路にして發見せられざりしならんには、吾が歐羅巴の基督教國は藥味、香料、生糸、藍、キャラコ等の不必要品を購入するが爲めに英吉利、葡萄牙及び低陸聯邦より年々彼地に派遣せらるゝ幾多の船隊によりて、其地金銀及び鑄貨を涸渴せしむるの憂なきを得たりしならんとの感想は當時に於ける俗論を支配したる所にして、旋て又東邦貿易の利益を主張する者の先づ第一に論駁せざるを得ざりし所のものなり。(A Discovrse of Trade, from England vnto the East-Indies. 一千六百二十一年第一版四――五頁。以下本書の引用は總て同版に據る)。而して之を論破せんが爲めには彼等は先づ這般の貨物が決して不必要品として目さるる可きものに非ざる所以を說明せざる可らず(同書五――八頁)。

這般の貨物中藥味香料の類が啻に人間の美食趣味を滿足せしむるのみに止らずして、彼等の健康を保持し疾患を救治するの必要品たる所以は當時に於ける科學者の意見に徵して明かなる所にして、Mun は Sir Thomas Elyot の著 Castle of Health 及び Rembert Dodoneus の著 History of Plants 等の諸書を擧げて之に答へたり。而して是等の貨物を使用せずして生存する國民は未だ其效用を認知せざるか若しくは之を認知するも貧窮にして能く之を購入するの資源を有せざるものなり。吾人より視て彼等を羨望す可きの理由些も存在せざるなり。次に生糸及び藍に至りては單に華飾の上のみならず這個の原料によりて撚糸織布染物の事業勃興し幾多の貧民は茲に救濟扶持せられて驅て又國家の繁榮を來すに至る可し。古くは伊太利の諸邦佛蘭西及び低陸聯邦の如き以て吾が殷鑑と爲す可きものなり。若し夫れ英人が近く取引を開始したるキャラコ貿易に至りては徒らに基督教徒の失費を以て異教徒を富ましむるの觀あり、毫も我に於て利益なきが如きも、然も亦特殊の效用なきにあらず、殊に英國に取りては一面に於て是に由りて外國貿易を增進し、他面に於て從來此國に輸入せられて法外なる高價を有したるカムブレー及び和蘭麻布並に其他の亞麻布の價格を減少せしむるの利益あるを忘る可らず。Mun は如上の所論を以て印度產貨物の必須なる用途を說明し得たるものと做せり。是等貨物にして果して無用の贅物に非ざるを知らば、そが從前歐羅巴に輸入せられたる手段方法と其現在に於ける狀態とを比較考量して孰れか我れに利益多きやを研究せざる可らず。(同書八――十九頁)

抑も歐洲諸國と東印度との貿易は新航路の發見に因りて初めて起れるものにあらず。從來是等の貨物は印度の各地より船積せられて、先づ紅海の Mocha 及び波斯灣の Balsera に到り次で土耳古人の手に駱駝背上五十日に亘る長途の旅行を終えて Soria の Aleppo 及び埃及の亞歷山利亞に輸送し、之より更に海路に由りて歐洲各地に頒布せられたる所にして、其間に於ける交易を主宰し來りたるものは實に基督教國共同の敵たる土耳古なりしなり。然るに全智全能なる神の攝理に基きて希望峰に由る東印度航路の發見は雷に紅海及び波斯灣に於ける印度人と土耳古人との通商貿易を著しく衰滅せしめたるのみならず、普く基督教國の福祉を增進し、特に英國に取りては自國貨物の販路を擴張し、以て從前に比し年々歐洲を去りて異教の地に輸送せらる可き銀の額を減少せしむるに至れり。斯くて Mun は香料藍波斯生糸等の貨物を從前の如く Aleppo に於て購入せずして、之を直接印度より購入するに至る時は從來基督教國より土耳古に輸出せられたる現金の内九十五萬三千五百四十三磅四志四片の巨額を節約し得可しとの計算を立てたり（同書十二頁）而して如上の大利益は單に之を商人の利潤としてのみ見る可きにあらず、是等貨物の低廉なる事實に因りて國家は亦其利益の大部分を享有し得可きなりと説けり。次ぎに東邦との直貿易は從來同一貨物に對して行へる土耳古への航海に比し商人が自己の投資に對して利潤を見るに至るの期間長く、危險負擔に對する失費も累み、從つて又船舶、糧食、海員其他の者に支拂ふ可き賃銀等の費用遙に大なりと雖も、斯くの如くして賣捌かれたる印度貨物の價格を構成する大部分は從前の如く異教徒に對して現金を以て支拂はるゝに非ずして自國内の資料と自國民の傭雇に對して給付せらるゝものなるが故に、一部人士の想像するが如く決して國家に危害を加ふるものに非ず、却つて其繁榮を助成するの效あるなり云々。而して此有利なる交易の事業を土耳古人の手より奪ひて其大部分を吾が英國の掌中に收めんと努力するものは正に英國東印度會社にあらずや。

然らば斯く有利なる通商貿易を維持する必要上吾人が銀を要求する正當なる理由に對し果して克く異論を挾み得る者ありや。論者或は土耳古領内に於ける取引は基督教徒に由りて他の貨物との直接交易、若しくは彼等が年々 Aleppo 亞歷山利亞、君士坦丁堡等に於て幾多の貨物を賣却して得たる貨幣に依つて行はるゝも

のなりと思惟す可しと雖も、然もヴェニス人と云ひ、佛蘭人と云ひ將た和蘭人と云ふも孰れも皆土耳古人の手中に存する諸貨物に對する其必須の欲求を滿足せしむるに足る程度まで多量の自國商品を彼地に輸出するものにあらず、波斯生糸の如き悉く現金を以て之を購入せざるを得ざるなり。唯だ英國人は他の國民に比し此點に於て大幅羅紗、錫其他の自國商品を多額に輸出するが故に利益の大なるものあるなり。Marcellis は年々少なくも九十萬磅の現金を Aleppo 及び亞歷山利亞に送るのみにして殆ど何等の貨物を輸出せず。Venice は巨額の商品と共に尙ほ十萬磅を輸送し、低陸聯邦も亦極めて少量の貨物と共に五萬磅の正貨を送り、Messina は二萬五千磅の現金を支拂ひつゝあるなり（同書十五頁傍註）。今 Genouay, Florence 及び Luca 等の情況を見るに是等の諸邦は少なくとも毎年五十萬磅の價格に達する生糸を Sicilia より購入し之に支拂ふが爲めに Naples, Palermo, Messina 其他の市場に於て年々約十萬磅の絹毛交織物其他の商品を輸出するに過ぎざるが爲めに結局其餘の三十五萬磅は勢現金を以て支拂はざる可らず、然れども彼等が甘んじて此巨額の正金を拋ちて毫も憂ふる所なき所以のものは何ぞや。彼等は是等生糸に加工し之を Franckf orde 其他の市場に輸送して販賣する時は正銀は再び伊太利に流入し來らざるを得ざる所以を久しき經驗に據りて知悉すればなり。海外の事情に迂遠なる人々は Venice の如き小邦、別しては佛蘭西の一部に過ぎざる Marcellis が斯く巨額の現金を輸出し得可き資源に就きて怪しむことある可しと雖も、彼等は之によりて收得したる生糸其他の貨物を各地に賣却し、其對價として充分なる貨幣の高を吸收するを得るなり。即ち匈牙利及び獨逸の鑛坑は多額の金銀を茲に向つて供給しつゝあるなり、他の伊太利諸邦就中 Genouay, Florence 及び Millane の如きは西班牙よりして充分なる正貨を收受して以て其大債務を支拂ひ得るなり。一時の出金は毫も憂ふ可きを見ず云々と。Mun は以上の所言を以て東印度貿易の過去及び現勢並に年々之が爲めに輸出せらるゝ貨幣の性質を明かにし彼等が之を遂行し得る資源を說くに於て充分なりと爲し、筆を進めて英國の東印度貿易が此國の總資源及び正貨を消滅せしむるものに非ずして寧ろ之を增大するに與つて力ある所以を論述せり（同書十九―二十八頁）。

東印度諸邦に在りては金は銀に對し其比價頗る低く、且つ英國の銀貨は西班牙

のRiallsと同一價値を有する事なく、加之英國は東印度會社に對し自國の金銀貨を輸出するの權能を賦與せず、單に一定の限度内に於て外國の正貨を年々輸送するを許すに過ぎざるの事實を知悉せざるものあらざる可し。而して同會社の帳簿に據りて明かなるが如く一千六百〇一年初めて斯業を開始してより一千六百二十年七月に至るまで彼等は規定に準じて同期間内に七十二萬磅を輸出し得可きに拘らず、僅に五十四萬八千〇九十磅の西貨を積出したるに過ぎず。而して彼等は又此十九ヶ年間に大幅羅紗、粗毛布、鉛、錫其他の内外貨物二十九萬二千二百八十六磅を輸出せり。從來殆ど何等の販路を有せざりし遠隔の地に斯く多額の輸出を見るに至りしは一大成功と云ふの外なく而して這個の貿易は最近三ヶ年間に於ける增額殊に著しく、將來に於て更に長足の進歩を期待し得可き充分なる理由存ずるなり。而して年々國内より東印度に輸出せられたる外國貨幣の高は同會社に對して交付せられたる免許狀の規定に準據して年々之と同一額の銀を國内に輸入す可きものなり。此規定は同會社に由りて常に誠實に遵奉せらるゝのみならず、規定以上に過剩金を存せしめて英吉利王國を富ましめつゝあるなり。而して此規定の力に據りて商人等は其對價として賣行き好き消費貨物を國内に齎すことなくして克く貨幣を回收することを得るなり。今東印度會社が年々十萬磅を積出し之を以て直接東印度諸邦に於て胡椒、丁香、肉豆蔻、荳蔻花、藍、支那生糸、キャラコを購入し之を英國に送附する時は Mun の計算に從へば四十九萬四千二百二十三磅六志八片を贏ち得ることゝなる。即ち三十九萬四千二百二十三磅六志八片の過剩は國家の總資本を增進したることゝなるなり。何となれば東印度會社は、該金額の大部分を關税及び輸入税として國家に提供し或は又會社の代理人、役員、海員に對する給料として之を支拂ひ、船舶、糧食、軍需、保險其他の經費に充當して之を消費し盡す可しと雖も、然も僅に船舶の資料を除きては孰れも皆國富の變形に過ぎずして其消費を意味するものに非ざるなり。

然れども論者、或は英國内に齎さるゝ如上の商品は國内に於て消費せらるか若しくは國外に輸送せられて他の貨物と交易せらるゝに終る可く結局吾人は上述の十萬磅を現金にて要することゝ爲る可しと謂はん。吾人は此論爭に際し第一に茲に所謂貨物は自國に對しては其用途大ならず單に交易の目的の爲めに之を要

するものと看做すこと、第二に之が交易に於て縱令當該貨物は輸出せられて更に國外より他の貨物の形態に於て國内に輸入せらるゝと雖も然も尙ほ之を以て國富を增進し國民を使雇するの用に供せしめ得ることを考案せざる可らざること、而して最後に之を一定の目的に從つて限定するの決意あらば其全價値は玆に現金の形態に於て回收し得ること疑問の餘地なしとの理由を以て之に答へんとす。何となれば是等の商品を有利に賣却し得可き伊太利、土耳古及び其餘の地方に在りては何時何人に由りて其貨幣を輸出するも自由なるに於てをや。吾人は貿易及び商品を除きて金銀を取得す可き手段を有することなし、吾人が印度貿易に使用する十萬の正貨と雖も曾て此國が國際貿易に依りて取得し得たる所にあらずや、然らば印度產の貨物と雖も亦此國に正貨を齎す可き力なしとせんや。貨幣は貨物の獲物にして貨物は貨幣の正しき用途なり、然れば貨幣は常に商品に附隨するものにして、兩者の關係は實に不可分なり。佛蘭西及び Venice が甘んじて每年六十萬磅の現金を土耳古に輸送する事情並に商業以外に何等の財源なき國家が克く般富を極むる所以を考察せば蓋し思半ばに過ぐるものあらん。此國の一般貿易にして其輸入年額に比し輸出年額の超過を見んか吾が金銀の存在量は當然增加せざるを得ざるなり。東印度貿易は正に每年四十八萬磅の輸出に對し僅に十二萬磅の輸入を行ふものにして結局三十六萬磅の輸出超過を示すものと云ふことを得可し。凡そあらゆる人間の行爲は皆其歸結を有せざるなし、東印度貿易亦窮極の目的なき能はず、印度物產を海外に輸送賣却し以て國内に貨幣を取得するもの即ち是なり。土耳古各地 Ligorne, Genowy 低陸聯邦 Marcellis 等皆此目的に供用せらる可き印度物產の市場なり。而して此國に於ける他のあらゆる貿易差額を合算するも未だ一東印度貿易の差額によりて取得す可き貨幣の高に達することなかる可し。Mun は斯く東印度會社の爲めに萬丈の氣焰を吐きつゝ第一の攻擊に對する駁論を終り第二の非難に向つて其論陣を張れり。

五

每年東印度貿易の目的を以て幾多の大船舶建造せらるゝが爲めに造船用材著しく稀少と爲り、從つて其價値頗る昂騰するに至れり、然も是等の船舶は遠洋航海の任に在りて本國に碇泊すること少なく偶々本國に歸航するも既に脆弱にして

直ちに用ゆ可くもあらざるが故に國家は其必要に應じて隨時之を使用する能はざるなりとは東印度貿易に對する非難の第二聲にして又 Mun が最も簡頸なる筆鋒を以て説破せんと試みたる所のものなり（同書二十九頁）。彼は先づ船舶の貴重なる效用を叙述し而して木材其他造船の用材は東印度貿易の開始以後國内に於て缺乏を告げ其價格騰貴せるが如き事實存せざるを立證せんとせり（同書二十九―三十一頁）。

羊毛は之を刈り樹木は之を伐るにあらざれば以て吾人が所要の貨物を獲得すること能はず。發生發育したる樹木は之を利用するの機會を失せば軈て又枯死朽廢するの秋に際會するを免れず。適當なる時機に於て適當なる用途に之を充用するの有利なる所以を知らば邦家の安寧幸福を確保す可き城壁堡壘と爲り貿易及び戰爭の用に供せられて其富裕と充實とを表彰する旗印たる巨艦大船の建造に優りて高尚且つ有利なる用途存在す可きや。而して其毎年の建造は幾百の窮民に糊口の資を與へ且つ吾が王國に取りて必須なる工匠の數を增加するに與つて力大あるに於てをや。

東印度會社の帳簿が瞭然吾人に明示するが如く各種の造船用材は時々其相場に多少の高低あるを免れざれども結局之が品質に於て價格に於て十五年以前と相違あることなく、彼等は之を愛蘭より輸入するが如きことなく依然 Hampshire, Essex, Kent 及び Barkeshire に於て購入しつゝあるなり。而して當時大船の建造を行ふものは獨り東印度會社に止らず、他の私設商社も亦擧つて造船に熱中せる有樣は實に英國空前の盛況にして加ふるに國家亦最近斷えず幾多の艦艦を新造して吾が無比の海軍は更に更に其强大を加へつゝあるを思はゞ船材の消滅缺乏に對する想像は蓋し杞人の憂に外ならざる可し。以上の非難は論據頗る薄弱なる愚蒙の見に基けるものなるが其後半の所論亦誤謬に過ぎざるを立證せんとして彼は語を續けたり（同書三十一―二頁）。

固より東印度會社に屬する船舶は商品交易の目的に供用せらるゝものなれば彼此の間を往來して常住國内に泊ること能はざるは勿論なりと雖も然も同會社は不斷に船材船具軍需糧食の類を準備して造船修繕艤裝出帆の用意を怠らず以て一朝事あるに臨んでは君と國との爲めに盡瘁せんと努力しつゝある其樣は一

度 Deptforde 並に Blackewalle に於ける同會社の構内及び倉庫を視察する者の熟知する所にして日々外人の訪問絶えず、彼等が陛下の威力を仰望歎賞するの標的と爲りつゝあるなり。加之東印度會社は彼此の間を往來し若しくは彼地に定泊せる船隊の外、年々斷えず七八隻の巨船を建造修繕艤裝して長途の航海に對する一切の用意を整えつゝあるが故に、彼等が大低陽春三月の交を以て彼地に出帆するに先んじ五六ヶ月の前よりして早く已に Themes 河上に繫留せられつゝあるを見るなり。而して彼等が解纜すると殆ど同時に同會社の船舶は印度より入港す可く、彼等は論者の想像するが如くさまで大破を蒙るものにわらざるのみならず。直ちに船渠に於て新裝せられ二ヶ月以内に新航海の用意完きを得るなり云々と。Mun は是れ以上に論者の謬妄を指摘するの必要なしとなし第三の非難に向つて辯疏の筆を進めたり。

——（未完）——

廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む

社長　樺山愛輔

專務取締役　高橋光威

本社　東京市京橋新肴町十番地
電話京橋特長四四九番、四五〇番
振替口座東京二〇八三三番

蓬萊生命

特徴

當社ハ生命保險相互組織ニ付會社ハ契約者ノ共有物ナリ
契約者增加ト共ニ利益多ク且株式會社ト異リ營業稅印紙稅等免除ニ付是等モ亦利益ナリ利益ハ契約者ニ配當ス